

『うたたね』と浮舟

劉 小 俊

(一)

「うたたね」は、『十六夜日記』の作者としてよく知られた阿仏尼のもう一つの作品で、彼女の若い頃の不幸な恋愛とその恋に傷ついた心を一人称で書き記したものである。その内容は約二年間にわたる体験を記したもので、大きく恋（失恋）・出家・旅と三つの部分に分けられる。また、次田香澄氏の説によれば、この作品は構造上、前半と後半に分けられ、前半はさらに前段と後段に分けて考えることができる。^①

前段は愛人との交渉と失恋で終ったその顛末を記したもので、期間は秋から起筆して年末まで。後段は突然の出走を中心とする出家、病氣・転居から帰宅までのことを書いている。期間は春のはじめから夏までの半年である。後半はその秋から年末まで数ヶ月で、養父に誘われた遠江への旅と田舎での生活及び帰京の旅が記されている。

「うたたね」は小品でありながら、恋の始終とそれに伴う自身の感情の動きを中心に貫いている、一つのまとまりのいい文学作品として、いろいろ論じられてきた。特に、その文章表現や心理

描写における先行文学を踏えたところや、あるいはその直接の引用が目だったため、研究者の関心も主にそうした方面に寄せられており、「うたたね」と先行文学との関係についての論文も少なくない。中には渡辺静子氏のように、本文と引用作品の対比によって「うたたね」の性格に迫る研究も見られる。^②

「うたたね」が古典をいかに多く摂取したかは、渡辺静子氏の作製した「本文と引用作品の対比表」によって一目瞭然である。この「対比表」によると、「うたたね」に見られる古典文学の影響は六十五箇所もあり、「伊勢物語」や「源氏物語」は言うまでもなく、引用された作品数は、このほかに十余にも及ぶ。しかも渡辺氏自身も言われたように、「もつと細かく見るならばまだその数は増す」こと^③と思う。本稿において取り上げた浮舟に関するいくつかの例の中には、まだ指摘されていないものも含まれている。

阿仏尼は「うたたね」を文学作品に成すにあたって、前記のように大量の古典文学を摂取した。彼女は、あるいは古歌を借りて自分の心情を表わし、あるいは物語の中の悲運の女性をわが身の上と重ね合わせて語っている。その中で特に注目すべきものは、

阿仏尼の浮舟に対する強い思い入れである。しかも、浮舟に基づく描写が、作品の「出家」の部分に、構造上から言えば、つまり前半の後段に集中していることもまた興味深い問題であろう。

(二)

出家を決意して、自ら髪を切り落した『うたたね』の作者阿仏尼は、自分のその折の心境を歌に詠んでいる。

歌きつつ身を早き頼のそことだに知らず迷はむ跡ぞ悲し

き

身をも投げてむと思ひけるにや

(二七—二八)

「身をも投げてむと思ひけるにや」とは、作者の後からの回想であるが、その時の作者が死の覚悟をしていたとも読みとることができであろう。しかし、覚悟はしたけれども、たとえ早瀬に身を沈めても、自分の魂が迷うであろうという不安と悲しみがしみじみと感じられる。この歌が浮舟の心境を下敷きにして詠まれたものであることはすでに指摘されているが、私見も加えてもう少し詳しく述べてみたい。

死を決意した浮舟も自分の思いを次の歌に託して表現している。

なげきわび身をば捨つとも亡き影に憂き名流さむことをこそ

思へ

(浮舟、八—九四)

前掲の「歌きつつ」の歌とこの浮舟の歌とを比較してみると、言葉そのものの引用こそないが、悲しみ悩んだ挙句、身をすて

ことに思い及んだ点はまったく同じである。またこの二首の歌に潜んでいる死後への不安も共通している。『源氏物語』を耽読し、物語の世界に心を投じた文学少女であった作者の阿仏尼が、わが身をすてようと決めた時、自分と同じように恋の悩みによってひどく思い詰めて死を選んだ浮舟の歌を頭に思い浮べることは、決して理解しがたいことではないだろう。そして、阿仏尼は自分の悲しい心情を前述のように浮舟の歌を踏えて詠んだのである。

このように、阿仏尼は浮舟を念頭において自分の出家を決意した時の心境を描いたと考えられるが、出家後はどうであろうか。

出家後の『うたたね』の作者は愛人への思いが立ち切れず、悩む余りにとうとう病身になった。そのため、作者は西山の尼寺から愛宕へ移ろうとするが、愛宕へ向って西山の尼寺を出ようとするところで、思いも寄らず別れた恋人に邂逅した。その時の描写をまず『うたたね』から引用してみよう。

泣く泣く門を引出づる折しも、先に立ちたる車あり。先花やかに追ひて、御前など事々しく見ゆるを、誰かばかりにかと、目留めたりければ、彼の人知れず怒み聞ゆる人なりけり。願しるき隨身など、紛ふべうもあらねば、かくとは思し寄らざらめと、そぞろ車の中恥かしく、端なき心地しながら、今一度それとばかりも見送り聞ゆるは、いと嬉しくもあはれにも、様々胸静かならず。

(三三—三四)

この場面は『源氏物語』源氏の巻の住吉詣の情景、すなわち、

をりしも、かの明石の人（中略）岸にさし着くるほど見れば、ののしりて詣でたまふ人のけはひ、渚に満ちて、いつくしき神宝を持て続けた。衆人十列など、装束をととのへ容貌を選びたり。「誰が詣でたまへるぞ」と問ふめれば、「内大臣殿の御願果たしに詣でたまふを、知らぬ人もありけり」とて、はかなきほどの下衆だに、こちよげにうち笑ふ。げにあさまじう、月日もこそあれ、なかなかこの御ありさまを遙かに見るも、身のほどくちをしようおぼゆ。

（源標、三二三—三三三）

という場面を遐想させがちであるが、私は敢えてこれは夢浮橋の巻に書かれた浮舟が僧院から遙かに帰途の蕨一行を望む場面と、手習の巻にある自分の来し方を思う時の浮舟の心情を踏まえて書いたものだと思う。この場面は、阿仏尼が当時実際に起ったことをありのままに書き記したと見るには、あまりにもできすぎている気がする。この場面は、事実であったというよりも、明白な創作意識によって、浮舟の心情を下敷きにして書かれたものだと思う。少なくとも事実を文学的に加工してできたものだと言える。次に「源氏物語」の本文を引用しながら、「うたたね」が浮舟の話からどんな影響を受けているかを具体的に考察してみよう。入水して横川の僧都に助けられた浮舟は、小野の僧院に世を忍ぶ毎日を過ごしていた。そんなある日、突然寂しいその僧院の前を横川から帰る蕨の車が華やかに通って行く。夢浮橋の巻には、

浮舟が遠くから蕨の車を見やる場面が次のように書かれている。

小野には、いと深く茂りたる背栗の山に向ひて、まぎるることなく、遇水の螢ばかりを、昔おぼゆるなぐさめにてながめゐたまへるに、例の、はるかに見やらるる谷の軒端より、前驅心ことに追ひて、いと多くともしたる火の、のどかならぬ光を見ると、尼君たちも端に出でゐたり。（中略）時々かかる山路分けおはせし時、いとるかりし隨身の声も、うちつけにまじりて聞こゆ。月日の過ぎゆくまきに、昔のこのかく思ひ忘れぬも、今は何にすべきことぞ、と心憂ければ、阿弥陀仏に思ひまぎらはして、いとどもの言はでゐたり。

（夢浮橋、八一—二六八—二六九）

前述の「うたたね」に書かれた恋人との邂逅の一節を、右記の描写に照らし見てみると、まず、自分の高い男が先払いをさせながら花やかに車で通りかかるのが偶然に女の目に入る、女はそれが昔の恋人の車だと分つてさまたま心が乱れるが、男は女の存在に全然気がつかない、という情況はまったく同じである。その上、女が今通るかかっているのが自分の昔の恋人の車だと分つたのは、かつて男が自分のところに通っていた当時の隨身がその先払いの列にいたからだ、というのであって、車の主を昔の恋人と断定する手段までもそっくりだ。

さらに、恋人の車に出会う時の、「うたたね」の作者阿仏尼が、恥ずかしいながらも今もう一度彼を見た喜びも感じるその複雑な

心情の描写にも、浮舟の影響が秘められていると思われる。次に引用するのは、手習の巻に書かれた浮舟の心情である。

はじめより、薄きながらもどやかにものしたまひし人は、このをりかのをりなど、思ひ出づるぞこよなかりける。かくてこそありけれ、と聞きつけられたてまつらむはづかしさは、人よりまさりぬべし、さすがに、この世には、ありし御さまを、よそながらだにいつかは見むずる、とち思ふ。なほわろの心や、かくだに思はじ、など、心ひとつをかへさふ。

(手習、八二二—二二三)

ここで、浮舟の複雑な二重の心情が表現されている。浮舟は自分の今の見苦しい姿を昔の恋人に知られるのが恥ずかしくて恐れるが、一方、心の中にはどうにかして彼の姿をもう一度見たいという願望も潜んでいる。この二重の心情において、前掲の「そぞろ車の中恥かしく、端なき心地しながら、今一度それとばかりも見送り聞ゆるは、いと嬉しくもあはれにも」思うという阿仏尼の場合と同じである。ただ、違うのは、浮舟はその後輩と会いたい願望を実現しなかったが、阿仏尼はどのように自分の恋人を見送ることができたのである。しかし、この違いこそ「うたたね」の作者が浮舟の心情を踏まえて自分の作品を書いているということとを語っていると私は思う。「うたたね」にも書かれているように、出家後も作者は恋人への思いを絶つことができない。恐らくその思いがあまりにも強すぎたのであろう。「源氏物語」を耽読し、

浮舟の話に心ひかれた作者は、浮舟の辛い気持ちに同情し、かつ触発されて、ついに浮舟の心情を下敷きにして、恋人と邂逅する場面を造って作品の中に書き、現実では実現できない自分の切ない思いを、作品の中で実現させたのであると考えられる。

右に述べてきたように、「うたたね」における恋人と邂逅する場面、及びその時の作者の心情は、夢浮橋の巻における浮舟が蕨の車を遠くから見る時の情景を場面として借用し、一方で手習の巻に書かれた浮舟の心情を作者阿仏尼の心理描写に利用して書いたと見られるのである。

(三)

「うたたね」の作者阿仏尼が出家直前と出家後恋人の車と偶然に出会う時の自分の心情を描く時には、浮舟のそれを強く意識したことは(二)に述べた通りである。しかし、阿仏尼の浮舟への思い入れは、決してその心情表現にのみ留まるものではない。心情表現以外にも、「うたたね」には浮舟の話から受けた影響が少なくない。例えば、「うたたね」の前半の後段には、作者が自ら髪を切り落し、夜中、雨の中を家から出て尼寺へ向う場面が書かれている。この夜中に出家する場面でも、自然現象の天候をはじめ、助けられた時の情景に至るまで、浮舟が入水する前後のそれとよく似ているように思われる。

ただ今も出でぬべき心地して、やをら端を開けたれば、晦頃

の月無き空に、雨雲さへ立重りて、いともの恐しう暗きに夜中より降出でする雨の、明くるままに、しほしと濡るる程になりぬ。

入る嵐の山の麓に近附く程、雨由々しく降増りて、向への山を見れば、雲の幾重ともなく押重りて、行先も見えず。

(二八—二九)

ここに掲げたのは、作者が出奔する夜の天候を描いた部分である。出奔には最悪の天気であった。重々しい雲、降りまざる雨が、真暗な夜をいつそう恐しく感じさせる。浮舟が入水しようと家を出た夜も、

皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風はげしく、川波も荒う聞こえしを、独りもの恐ろしかりしかば、来し方行く末もおぼえて、寶子の端に足をさしおろしながら、行くべき方もまどはれて、帰り入らむも中空にて、心強くこの世に亡せなむと思ひ立ちしを、をこがましくて人に見つけられむよりは、鬼も何も食ひて失ひてよ、と言ひつつ、つくづくとゐたりしを、

(手習、ハ一八九)

のように「風はげしく、川波も荒い、やはり悪天候であった。ここで、「雲」「雨」と「風」「波」は違ふ自然現象であるが、いずれもよい天候でなかった点は同じであろう。『うたたね』の作者が自分の出奔する夜を、浮舟の入水しようとする夜と同じように、人に恐怖感を抱かせる夜として描いたのは、あるいは単な

る事実上の偶然であつたかもしれない。しかし、次の作者が助けられる場面を考え合せてみると、これも恐らく浮舟の入水しようとする前後の描写を念頭に入れて書いたと考えられる。

いたく廻り果てにければ、松風の荒々しきを頼もし人にて、此れも都の方よりと覚えて、蓑笠など着て、囁り来る女あり。小童の同じ声なると物語するなりけり。此れや桂の里の人ならむと見ゆるに、ただ歩みに歩み寄りて(中略)頻に身の有様を尋ねれば、「此れは、人を怨むるにもあらず。又、口論とかやをもせず。ただ思ふ事ありて、此の山の奥に、尋ねべき事ありて、夜深く出でつれど、雨も夥しく、山路さへ迷ひて、来し方も覚えず、行く先も知らず。死ぬべき心地さへすれば、此処に寄居たるなり。同じくは、其の辺まで導き給ひてむや。」と言へば、愈々いとほしがりて、手を控へて導く。

(二九—三〇)

雨が降りまざる夜中に、道に迷つた作者が松風の荒々しい木陰に立ち寄つて休んでいるところに、桂の里の人が歩いてきて、事情を聞いてから親切に助けてくれた。この場面は、手習の巻の浮舟が横川の僧都の一行に発見される時の情景を連想させる。

森かと思ゆる木の下を、うとましのわたりや、と見入れたるに、白きもののひろがりたるぞ見ゆる。「かれは何ぞ」と、立ちとまりて、火を明くなして見れば、もののゐたる姿なり。(中略)頭の髪あらば太りぬべきこちするに、この火とも

したる大礎、憚りもなく、奥なきさまにて、近く寄りてそのさまを見れば、髪は長くつやつやとして、大きな木の根のいと荒々しきに寄りあて、いみじく泣く。

(手習、八一七五)

雨の中、疲れ切つてほとんど失心状態になって、木にもたれたまま坐っている『うたたね』の作者の姿は、「大きな木の根のいと荒々しきに寄りあて、いみじく泣く」浮舟の姿と重なっている。これを前述の出奔する夜の天候描写とも合せてみると、単なる偶然であつたと片付けるよりも、『うたたね』の家を出てから尼寺に辿り着くまでの描写は、『源氏物語』に見られる浮舟の入水しようとする前後の描写を踏えて書かれたものだと言つた方がよからう。

(四)

以上論じたところをまとめてみると、『うたたね』の作者が、自分の出家を書き記した時、つねに浮舟の入水しようとする事件を頭に浮べ、自分の作品にその影を漂わせている。浮舟の話の影響は、出家前、出家後だけではなく、出家を遂げるための出奔にも及ぶ。「出家」すなわち前半の後段に当たる部分は、『うたたね』を支える三つの柱の一つであり、この部分抜きでは『うたたね』が成り立たないの言うまでもないことであらう。これによって、『うたたね』が『源氏物語』における浮舟の話とどれ

ほど密接な関係を持つているかは明らかであらう。

では、阿仏尼が浮舟にこれほど深く魅かれたのはなぜであらうか。それは、経歴において、阿仏尼と浮舟との間に相似ている点が多いからだと思ふ。

『源氏物語』における浮舟の本格的な登場は、東屋の巻であるが、その話は早くも宿木の巻に出ている。周知のように、浮舟の実父は八の宮と呼ばれた皇族であるが、その出生が父に認められないままに、浮舟は母親の再婚によって、地方官の養父を持つことになった。その後、地方官の娘として田舎で育てられ、二十才ぐらいでやつと上京。上京後、薫に愛され、いろいろ苦勞した華句、やつと幸せをつかんだと思つたその矢先に、突然訪れた匂宮のために、恋愛の三角関係に悩まされ、苦しみの淵に落ち込んで、死の覚悟をして入水したが、助けられた後は周囲の人々の反対を押し切つて、薫や匂宮の悲しみもかえりみず出家の志を遂げた。

阿仏尼の実父が誰かは不明であるが、かなり身分の高い人だと推定されている。母の再婚によって、彼女は佐渡守である平度繁の養女になった。そして、安嘉門院に仕えていた頃、ある貴族の男性に愛され、『うたたね』に書かれた恋をした。一時は甘い恋も体験したらしいが、まもなく見捨てられ、失恋の苦しみを味わうようになった。その悲しみから逃れるため、自ら髪を切り落して出家した。阿仏尼は養父とともに田舎で長く生活したことはないようだが、失恋後養父に畔われて、遠江の国に一ヶ月ほど滞在

して帰京した。

浮舟は皇族の血をひく娘でありながらも、母の再婚によって地方官の娘になり、身分の低い田舎者と見られて、さんざん苦勞をしなければならなかった。そういう浮舟と同じように、阿仏尼も実父が貴族なのに地方官の娘として育てられてきたので、『源氏物語』を読んで、まず誰よりも浮舟に同情し、親近感を抱いたのであるに違いない。

二人の男性に同時に愛された点では、浮舟と阿仏尼は違うけれども、その恋に悩まされて、「さすらふ」身になった恋の結末は同じである。浮舟は決して幸福な女性ではない。二人の貴族の青年の愛によって、彼女は幸せを手にするどころか、かえって不幸に打ち落とされ、入水へと追い込まれたのである。貴族の男性に言い寄られ、そのため失恋の苦しみを味わい、世を捨てて辛に思いをした阿仏尼は、恐らく浮舟の苦悩の姿に自分の姿を重ね合わせ、強く心を打たれたのであろう。

「出家」の部分だけではなく、『うたたね』の全篇において、作者は先行の和歌や物語の世界と自分の世界とを融合させ、その中で自分の体験や心情を語っていく。極端に言えば、古典の歌や物語の影響なしに、自分の体験だけをひたすら事実のままに書き並べていくだけでは、『うたたね』は文学作品としては成立し得なかったであろう。『うたたね』と『源氏物語』における浮舟の話を対比し、その関係を明らかにするのは、『うたたね』全篇を

理解する上ですこぶる重要な意味を持つものと思われる。

〈注〉

- ① 『うたたね全訳注』講談社学術文庫、昭和61年。
- ② 『中世日記文学論序説』新典社、一九八九年。
- ③ ②に同じ。
- ④ 『うたたね全訳注』講談社学術文庫、昭和61年。『中世日記文学論序説』新典社、一九八九年など。

〈テキスト〉

うたたね

『校註阿仏尼全集』増補版 築瀬一雄編 風間書房 昭和58年。

源氏物語

新潮日本古典集成本 昭和51年～60年。

〈参考文献〉

- 日記文学の研究 玉井幸助著 塙書房 昭和40年。
宮廷女流日記文学 池田亀鑑著 至文堂 昭和2年。
中世女流日記文学論考 今関敏子著 和泉書院 昭和58年。
(甲南女子大学大学院博士後期課程)